

そろうがく

(No. 49)

27. 3. 4 発行

現職研修委員会

総合的な学習部編集



学力を上げる総合的な学習の時間

総合的な学習部長

清水 範彦

愛知県は、全国で四十七位。
八月二十五日に公表された平成二十六年全国学力・学習状況調査小学校国語Bの結果です。その他にも、小学校算数Aは四十五位など、愛知県の小学校の結果が全国的に低位にあつて、驚いた先生が多いのではないのでしょうか。

国立教育政策研究所が公表している結果の概要の「学校における指導等と学力等の関係」には、総合的な学習の時間と平均正答率との関係の分析があります。

学校質問紙で「総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導を行った」を「行っていない・全く行っていない」と答えた小学校と「よく行った」と答えた小学校では、平均正答率が下記のように二・三%の差があります。中学校では、三・五%もの差があります。

国語A	71.4%→73.9%
B	71.4%→73.9%
算数A	71.4%→73.9%
B	71.4%→73.9%
行っていない→よく行った	

また、「総合的な学習の時間において、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習に取り組んでいる」と回答している児童生徒の方が、全ての教科で平均正答率が高い傾向が見られると、分析してあります。具体的には、小学校国語Bの平均正答率で見ると、「当てはまる」と答えた児童が六二・四%に対して、「当てはまらない」は、四二・七%で、大きな差があります。算数や中学校の結果で

も同じ傾向があります。

つまり、総合的な学習の時間にきちんと取り組んでいる学校ほど、全国学力テストで測れる学力が高いということでは、愛知県はどうでしょうか。「総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導を行った」と回答した小学校は、全国の七九・七%に対して、愛知県では七五・七%しかありません。中学校は全国の七九・六%に対して七九・七%でほとんど同じです。愛知県の小学校の平均正答率が全国平均より低く、中学校は全国平均と同じくらいという結果と一致します。

美合小学校では、「美合小のESDあいうえお」として、全教科・領域で、ESDを行っています。五つの項目

「あ」あいつ・表現	コミュニケーション能力・表現力の育成
「い」いのち・心の醸成	岡崎の教育【心の醸成】
「う」うみだす	岡崎の教育【環境教育】
「え」えいご	岡崎の教育【英語活動】
「お」おもいをもつ	思考力・判断力・活用力の育成

に分類することにより、育てたい力や学習内容がよく分り、各担当が実践をしやすくなっています。しかし、総合的な学習の時間において、探究的な学習には十分になっていません。これから検討をしていく必要性を感じています。

今年度、総合的な学習部の研究主題である「自ら探究し、共に学び合う総合的な学習の授業」に積極的に取り組んできた学校は、来年度の学力テストの結果が良いかもしれません。

本年度のまとめ

生活・総合指導員 根石小 船越 学

ESDの十年目となる今年度、生活・総合においても、環境学習プログラムを含め、ESDの立場に立った取組は定着してきたと言えます。そんな中で、生活・総合を中核に据えている学校は、学力が高いことが報告されています。より価値をはっきりさせるため、その単元・授業によって、子供たちに、どのような力をつけていくのかを意識して取り組むことが、大切になります。

A小学校のB先生は、四年生の環境学習プログラムを發展させて、「いらなくなった服をごみにしない方法を考えよう」を課題に授業をされました。話し合いの後、ゲスト・ティーチャーである繊維組合の方の話を聞きました。衣服が資源として生まれ変わることを知った子供たちは、ESDの構成概念を深めていきました。C小学校のD先生は、大きく変貌しつつある学区を舞台に主体的な調べ学習を進め、全校児童や学区の方へのアンケートをもとに、「みんなが楽しめる公園」の在り方を考えさせました。集約した案を行政に反映させることによって、社会参画力が高まります。E中学校のF先生は、二年生の環境学習プログラムに沿って単元を進めつつ、学区で行われる「池干し」の活動に子供たちを参加させました。「絶滅危惧種は守れるのだろうか」をテーマに話し合う中で、実際に「池干し」に参加した子供たちの、実感を伴った意見が聞かれました。社会参画力を身に付けていく場面でした。G中学校のH先生も、同じテーマについての話し合いを、一人一台のタブレットを使い、グループごとで発表させてから話し合いました。本質的な学びを通して、コミュニケーション力・ICTを使う力を高めていきました。今後、持続可能な社会づくりに参画できる人を育てるため、生活・総合は中核となることも重要な教科・領域です。これからも、その意味をふまえた上で、先生方ご自身が個性・独創性を発揮され、子供たちと共に単元・授業づくりを楽しんでいきましょう。

研究発表会公報

■井田小学校研究発表会

十月十日(金)、井田小学校の自主研究発表会が開かれました。「井田ツッキーのふるさと創生」の魅力ある『ふるさと井田』を創造する子供の育成」を研究主題として、生活科・総合的な学習の時間を実践の中心に据えて行われました。

大きな転換期を迎えている学区で生活していく子供たちが、学区に関わりながら、「ふるさと」としての愛情と誇りを持ち、意欲的にふるさと創生に取り組んでいくことを目指しています。単元全体を「知る」「考える」「創る」「伝える」「省みる」の五段階に分け、それぞれに付けるべき力も考えられていました。

公開授業では、各学級共、継続的に関わってきたことを生かした授業が行われました。五年生の授業では、学区で唯一の水田である「井田んぼ」を舞台に、「井田んぼ」を作られた学区の方に教わりながら稲刈りをする姿が見られました。また全体会では、六年生全員による「ふるさと」の合唱が行われ、最高学年としての「ふるさと」への思いの高まりが感じられました。



■豊富小学校研究発表会

十月十五日(水)、市の委嘱を受けた研究発表会が、

豊富小学校で開かれました。「ふるさとを愛し、ふるさとを守り育てる子どもの育成—ふるさとの「ひと」「もの」「こと」から協同的に学ぶ場を通して—」を主題にし、地域を教材化した実践が公開されました。

どの学年も、継続的な「学びのつながり」を大切に、ふるさとの「ひと」「もの」「こと」に繰り返し触れ合わせることで、ふるさとを愛する心を育もうとしていました。また、課題解決の場面で「思考ツール」を活用し、課題に対して主体的に取り組めるよう、考えられていました。他者との関わりを大切にす「とよとみしぐさ」も具体的に考えられ、活動の根底を支えていました。

三年生の総合の授業では、地域の牧場での体験をもとにして、「子牛の世話をする」とができるかどうか「思考ツール」を使いながら、真剣に話し合う姿が見られました。

助言者の久野弘幸先生からも「世代を越えてつながり合う」ことがふるさとの持続性となると、確認されました。



岡崎総合的な学習研究会の活動報告

矢作中学校 高沢 秀昭

一月二十五日(日)午前九時三十分より、「おかげぎ自然体験の森」において岡崎総合的な学習研究会&生活科道場が開かれました。十六名の参加者にお集まりいただき、自然体験の森の河江喜久代さんを講師に招いて『冬でも生きてる植物たちとふれ合おう〜冬の森を歩いて、植物たちの息吹を感じよう〜』をテーマにフィールド研修型の学習会を行いました。

河江さんの案内で、散策コースを歩きながら、冬でも生きている生き物たちを探しました。その中でたくさん新しい発見をすることができました。まずは樹

木の見分け方です。アベマキはクヌギとよく似ていますが、葉っぱの裏を見ると白っぽいのがアベマキであることや戦争中コルクの材料として活用されていたことが分かりました。また、サンショウは棘が二つ対で付いている「対生」であるのに対して、イヌザンショウは棘が一つずつ方向を変えながら交互に付く「互生」であり、棘の付き方で見分けることができることを教えていただきました。次に樹木の活用の仕方です。クヌギは樟脳として防虫剤などに加工されたり、い草は畳表に使われたり、人々の生活に役立てられていることも知りました。

また、イヌザンショウ、イヌワラビ、カラスザンショウ、カラスエンドウなどの名前を覚えていただく中で、「イヌ」「カラス」などの動物の名前が付けられている樹木や植物がたくさん生息しているのだと感じ、名前の付け方にも興味がありました。

また、散策中、シダの葉っぱをちぎって紙飛行機のように飛ばしたり、木の実を路面で弾ませたりすることを通して、ただ単に観察をするだけでなく「植物での遊び方」も教えていただき、植物と楽しくふれ合う一つの方法を身に付けると共に、目の前の子供たちとこのような活動をしてみたいという気持ちが大きくなりました。

さらに、河江さんお手製のドングリクツッキーとイタドリの茎で作った笛をお土産にいただき、舌や耳で自然のすばらしさを楽しむことができました。

「おかげぎ自然の森」では今回紹介した散策だけでなく、「工作棟」での間伐材を使った工作や、「炭焼き窯」での炭焼き体験などができます。「自然との共生を体感する」という視点で、有効活用できる施設であると感じました。

